

フランス世紀末文学叢書 III

碧玉の杖

アンリ・ド・レニエ

志村信英 訳

国書刊行会

フランス世紀末文学叢書③

碧玉の杖

定価 二二〇〇円

一九八四年五月一五日 初版第一刷印刷

一九八四年五月二〇日 初版第一刷発行

訳者 志村信英

発行者 佐藤今朝夫

発行所 株式会社国書刊行会

東京都豊島区巢鴨三―五―一八

電話〇三(九一七)八二八七 振替東京五―六五二〇九

印刷 セイユウ写真印刷株式会社

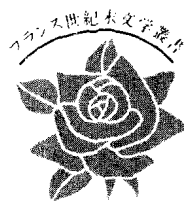
製本 大日本製本株式会社

Henri de Régnier
La Canne de Jaspe

碧玉の杖

アンリ・ド・レニエ

志村信英 訳



口絵選定 澁澤龍彦
装幀 山下昌也

目 次

アメルクール卿

I	アメルクール卿	二
II	海と恋の冒険	三
III	シマンドル卿よりの手紙	四
IV	奇妙な晩餐会	五
V	ヌアートル氏とフェルランド夫人の死	六
VI	コルディク島への航海	七
VII	鍵と十字架の徴	八
VIII	壮麗な家	九

黒いクローバー

エルマゴールの物語	九
エルモクラートの葬儀	一〇

気儘なる短篇

青髭の六度目の結婚……………一三五

戸棚でみつかった手稿……………一四三

エルモジエヌ……………一五三

七つ鏡の貴婦人の話……………一六二

雪の中で眠った騎士……………一七四

生きているノッカー……………一八〇

予期せぬ杯……………一八九

訳者後記……………一九五

口絵 モーリス・ドニ《イヴォンヌ・ルロール嬢の肖像三態》

碧玉の杖

ア
メ
ル
ク
ー
ル
卿

ガ
ブ
リ
エ
ル
・
ア
ノ
ト
ー
に

I アメルクール卿

私はここにアメルクール卿の伝記を書くこととする意図はいささかもない。その素晴らしい計画には、ほかの人々が忍耐強く、はてしれぬ配慮をしてとりかかっている。私は彼らの精密な探究の後塵を拝して書いていこうとは思わない。彼らが一点一点解明しているアメルクール卿の生涯は特異なものであった。数々の状況がその人生を特異なものにしたのであるが、その特異さは死後に注目をよんだことによって増大した。

それというのも、さまざまな歴史的事件の特殊性と絡繰からくりを詳細に探究する人々のなかに、この人物へのしんしんたる興味が湧き起ったのである。一つの調査が幾つかの面からの探索となり、多くの困難をとまなう研究が関与し、彼の生涯の謎をつぶさに解明してきている。

アメルクール卿が生前に得たような栄光ほどすみやかに忘れ去られるものはない。多くの戦闘での冒険と恋愛での好運をものした彼は、時代の先端をゆく恋の流儀と勇猛果敢な遊撃隊での勲功によって当時きわめて注目の的となっていたが、史料編纂官のように机にむかって静かに夜を徹して歴史をふりかえるより、むしろ探訪記者のようにあちこちをとび廻って時代の動きに参加するは

うに夢中になっていたらしい。学者たちの研究により彼が史上有数の大事件の数々に暗躍していたことを知った私の驚きはかなりのものであった。それに、ただ陰謀の数々に関与していただけでなく、彼がそれらの発端を結末まで導き、筋を大詰めにまではこんでいったといふのであるからなおさらである。

アメルクール卿は徐々に歴史の舞台に登場していった。最初は彼も舞台上にいうだけであったが次第に重鎮になっていき、また彼が名高い重臣、顯官たちの偉大さや才能が虚偽でうわべを飾るだけのものにすぎないことを暴露するにつれ、彼は影で君臨するにいたった。彼に正体を見破られた名高い宮廷人たちはもはや偽りの仮面をかぶった操り人形にすぎなくなった。彼らの仮面の下には、宮廷人特有の表情法ゆえ芝居がかって誇張された、彼らを裏で操る謎の教唆者の繊細な微笑が見てとれた。謎の教唆者とは他ならぬアメルクール卿である。もっとも卿は宮廷人たちの表情法を嫌悪していたが、かくして彼は己が時代を誘導した男となった。隠蔽されていた彼の行動はあばかれた。結局、彼に時代の指導者をみとめることは正しいことのようにだ。そうなのだ。そうであつてこそ、いろいろの行為にほとんど奇蹟的といえるほどに一貫した符合が見られる理由がわかつてくる。時代の影の指導者であつたとしてみれば、彼の人生のさまざまな出来事が、歴史家のいうその時代における意義および他の事件との係わりに関し、おのずからびつたり嵌絵として完成する。それはまさしく生涯を通しての奇妙な符合である。蓋然的な事実が、歴史上の真実という建築物を形づくるほどに堆く積み重なっているのである。

幾つかの理由でアメルクール卿の思い出は私には大切なものであるが、彼の死後になされた歴史家たちの探究によるかくも驚異的なアメルクール観の修正を、私は異を唱えずに受け入れたい。私は子供のころからアメルクール卿を崇拜してきた。彼の家と私の家とは親類だったため、私の家でも彼についてさまざまな噂話をしていた。それらを覚えている私は、近親たちの間で、彼がかなりの人物であり、たいそうなことをしているらしいとうすうす憶測されていたことが事実であったと立証され、いまそれが世のすべての人々に浸透していくのを楽ししく見守っているのである。家の者たちは実によくこの傑出した人物について噂をしたものだ。情事の噂も含めて彼のあらゆる種類の冒険談は私のまえでも黙されることなく語られ、私を喜ばせたものであった。それらに抱いた興味が私の記憶から消えたことはかつてなく、この子供時代の熱狂が強くつづいていたからこそ、のちに私はこの多くの素敵な物語の主人公を実際に足繁く訪れる榮譽を得ることになったのである。

アメルクール卿は、彼の死を報じた新聞が註を要さなかったほどに、生涯の終りの二十年をこの上なく大きな隠棲所ですごした。

彼は知らぬものなき失寵を蒙り、その後、国を去った。彼は旅をし、忘却がきた。彼は、かつての謎にみちた脱牢による風聞の他には、薄っぺらな声価、情事と戦争での若干の偉業、微かな名声をもたらしした幾つかの奇行の思い出しか残さなかった。この最後のものから促されて、のちに探求が始まり、あいつぐ発見が彼を先の高みにもたらしことになった。

私は、アメルクール卿の死に先立つ沈黙期間には十代末であったが、遠い地方のある町の旅館で

私にとっては親密な伝説のすべてに結びつくこの名前が人の口の端にのぼるのを聞いたのであった。私はあちこちを調べまわり、そのアメルクールがまさしく私の若き日に夢見た名高い侯爵であるとの確信を得た。私はどうにかして彼に面会しようとした。彼は私の求めに応じてくれ、もちろん私はでかけていった。

広場の端にアメルクール卿の館が見えた。それは石灰岩でできた宏大な建物であった。破風の下方に三つの窓があって、中膨れの鉄柵のある露台に開き、それは玄関の両脇に突出した一体づつの女人像柱カリヤティドによって支えられていた。他の窓には鎧戸が閉まり、一階の窓には鉄格子がはめられていた。破風はその斜行する三角形で、屋根の飾りの火焰壺はひびの入った小さな黒い集団となつて、建物の正面に影を落していた。ひとけのない広場の中央には噴水があつて低い水盤にふりそそいでいた。陽を浴びて眠っている一匹の犬が飛んできた虫を口にくわえとつた。虫はあちこちにぶんぶん羽音をたてていた。塀のうえにとまった幾つかはそれに象嵌されているかのようであつた。私が鳴らしたノッカーになつてゐる牝鹿の脚からは三匹が飛びたつた。

暑さのために麻痺したような広場から入ってきた玄関内のうつて変つた冷気を私は味わつた。アラベスク模様の化粧漆喰が黄色と緑の大理石の敷石のまわりの壁にきらきら光っていた。びっこをひいた下僕が私を案内して食堂をぬけていったが、そこにはまだ食器類が下げられずにおかれていた。銀の皿のうえには果物の皮が反りかえていた。クリスタルのカットグラスのなかの葡萄酒がテールブルクロスに鮮紅色の光を投げ、ピメントとお菓子と煙草の匂いがたちこめていた。戸口の

カーテンをあげながらその男が言った。

「侯爵様はいまここにおられません。私がお知らせして参ります。いつもの散歩場にいらっしやいますので」

私は縦長の広間にいた。うち並ぶフランス窓は庭園に向いていた。外壁を綴れ織のように覆っているにちがいない蔓薔薇から幾つかの花があふれだしていた。一輪は素晴らしく赤い豪華なもので、その花卉の妙なる肉を窓ガラスにびったりと押し付け、別の小さな白い薔薇はガラスの緑がかつた色調をとおして気持よく凋れてるように見えた。窓からは二面の花壇が、刈り込まれた高い黄楊の半円に囲まれた泉水に接しているのが見え、そこを起点として分岐する三条の並木の小径があったが、この光景は部屋の奥の壁板にはさまれた三つの金泥塗りの渦脚台のうえに置かれた大鏡に逆に映っていた。そこここに小さな台座に据えられて古代の胸像が立てられていた。綴れ織張りのソファや安楽椅子があり、重々しい腰掛けや途方もなく大きい肘掛椅子が壁に寄せて置かれていた。中央には、美しい石理の入った瑤瑤の花瓶ののったテーブルがあり、花瓶のわきには眼鏡の金縁がなかばのぞくケースがあった。

侯爵は八十歳という高齢にもかかわらず相変わらず元気がいい、と私は聞いてきていた。毎日鉄球で勝っていると。彼は私に会ってくれるためにそれを脱げてきたのであった。

彼は中央の小径の果てからやってきた。上背のある体軀が屈んで杖を突きつつ歩いていた。錦織りの絹のコートの裾が彼の臍にあたっていた。フランス窓まで来てそれをあげようとしたとき彼